

## かわつら next800

### 佐藤 慶太

(秋田県漆器工業協同組合 理事長

／株式会社佐藤商事 代表取締役)



#### 【川連漆器の歴史】

川連漆器の歴史は古く、鎌倉時代の1193年頃に源頼朝の家人で稲庭城主の小野寺重道の弟、道矩公が古四王野尻（現在の川連町大館地区）に館を築き、家臣に命じて刀の鞘、弓、鎧などの武器に漆を塗らせたのが始まりとされています。

その後、当地で本格的に漆器産業が始まったのは17世紀中頃、元和から元禄にかけてであり、川連村を中心に約26戸が椀師稼業を営んだとの記録が残っています。

藩の許可を得て販路を他国に拓き、江戸時代後期には藩の保護政策のもと、椀、膳、重箱など幅広い漆器がつくられるようになり、沈金、蒔絵の装飾も加わり、産業基盤を大きく築きあげました。

1869年(明治2年)の漆器生産額は2,000両と藩の記録にあります。また、1896年(明治29年)には当組合の前身である川連村漆器同業組合が発足し、翌年には第1回品評会を開催したそうです。この頃の椀木地生産方式は「水車式ろくろ」や「足踏み式ろくろ」が主流でした。

大正から昭和前期にかけては、稲庭水力電気株式会社が営業を開始し、椀木地生産は「電動ろくろ」に変わります。また、秋田県立川連漆器試験場が設置され、技術研究と開発が進み、

時の内閣総理大臣である斎藤実氏が視察に訪れるなど、産地への注目が集まり出しました。

戦後の高度経済成長期には、家庭の日常使いの器として汁椀が関東近辺へ多数出荷されました。また、旅行ブームで活気づく温泉地へ膳や椀の出荷が増え、1976年には国の伝統的工芸品に認定されています。

1996年には県の伝統工芸品にも指定され、1998年と2000年の全国漆器展では内閣総理大臣賞を受賞。堅牢さを誇る実用的な器として庶民生活に密着し、地域の主要産業となりました。

#### 【当組合について】

秋田県漆器工業協同組合は、1950年(昭和25年)に現在のかたちへと組織を改め、今年で70周年を迎えます。

当地の製造業者の特徴としては、木地師、塗師、蒔絵師、沈金師など分業体制となっていることが挙げられます。よって、小規模であったり、個人で営んでいることも多く、材料の共同購入や製品の共同販売を行うなど、川連漆器の製造に携わる人のための組合組織として、発足以来、産地のものづくりを支えてきました。また、伝統的な技術を後世に継承するための、人材育成機関としての役割も担ってきました。

### 【川連漆器を取り巻く状況】

約800年の歴史を持つ川連漆器製造も近年は厳しい状況にさらされているのが実情です。

汁椀など実用品として使われてきた川連漆器ですが、安価なプラスチック製品の登場や日本人のライフスタイルの変化など、様々な要因が重なり、現在の出荷額は15年前と比較して約25%減少し、さらに従業者は約59%も減少するなど、産地としての活気が失われつつあります。

さらに、我々の業界にも高齢化の波は容赦なく押し寄せており、技術の伝承についても危ぶまれている状況です。

そのような危機感から2016年には、これからの産地のあり方を決める協議会を発足させ、専門家の指導も交えながら、様々な立場からの意見を統合し、産地の今後の繁栄と、深刻な後継者不足や高齢化などの諸問題について話し合いました。そして、漆器づくりの継承のために、『組合員一人ひとりの多様性を全体の力とし、生活の向上と幸福の追求を目指す』ことを理念として定め、これに向かって力を合わせていくことを決めています。

### 【知名度向上のために】

とはいえ、具体的なアクションがなければ何も前には進みません。そこで、まずは川連漆器の知名度向上が必要と考えました。

当地は漆器づくりの歴史を大切に守り続け、木製お椀の製造では日本一を誇った産地でありながら、その知名度は決して高いものとは言えません。そこで、品質に見合った認知度を得るため、2017年に「産地マーク」を開発し、商品のパッケージや包装などにも使用しています。

また、組合の活動については、プレスリリー

スも積極的に行うなど、漆器づくりの現状を県内外に広く知ってもらうための情報発信を強化していきたいと考えております。



### 【裾野拡大に向けて】

さらに、より多くの人に使っていただけるよう、これまでの個人利用中心から、飲食店や学校や介護施設での利用にも広げていきたいと考えています。しかし、それを実現するためにはクリアしなければならない大きな問題があります。それが食洗器への対応です。

そもそも川連漆器は、伝産法（伝統的工芸品産業の振興に関する法律）により、その工法も含めて厳密に定められています。従来は、この伝産法に適合したものは食洗機には対応できないと考えられていました。そこで、秋田県立大学などと共同研究を進め、木地そのものから見直し、その結果、伝産法に適合したまま食洗機に対応できる道がようやく開けつつあります。

川連漆器は、もともと芸術品というよりは実用品です。食のサポート役として、様々な場面で使用してもらうことで本来の価値を発揮します。食洗器に対応できるということはその可能性を大いに広げるものと期待しています。

【海外展開について】

今後の取組みとしては、海外への売り込みにも一層力を入れていきたいと考えています。

特にヨーロッパ諸国では、我々日本人が考える以上に「エコ」や「自然」に対する意識が高く、天然木材をベースに、抗菌作用のある天然漆を使用した漆器は高い評価を得られると感じています。加えて、海外での日本食ブームも盛り上がりを見せており、現在はロンドンの三ツ星レストランで実際にテーブルウェアとしての使い心地を体験してもらう「テストマーケティング」にも取り組んでいます。その他、各地の展示会へ出品を行うなど、川連漆器に対する認知度も少しずつではありますが、得られてきたようで、モナコ公室御用達の専門店からも問い合わせをいただいている状況です。

【次の800年に向けて】

海外展開も含め、組合として様々な事業に取り組んでおりますが、いずれも川連漆器を後世に残したいとの思いから行っているものです。産地の現状は大変厳しく、成り行きに任せるだけでは衰退の一途を辿ることになりかねません。今こそ産地全体で川連漆器の将来を真剣に考える必要があり、そのための中長期ビジョンとして「産地復興ビジョン～かわつらnext800」を

新たに掲げております。伝統産業を守るためには経済的な面も含め、職人が安心してその技能を発揮できる環境が重要です。本ビジョンの目指すところは、文字通り「つくり手第一主義」です。つくり手を守ることで漆器業に携わる一人ひとりの幸福の追求へとつながり、それが、川連漆器の次の800年に向けた一歩となることを信じ、前に進んでいきたいと思えます。



(「川連漆器伝統工芸館」外観と展示コーナー)

組 合		概 要
1 組 合 名	秋田県漆器工業協同組合	5 F A X 0183-42-2633
2 代 表 者 名	理事長 佐藤 慶太 (株式会社佐藤商事 代表取締役)	6 U R L <a href="http://www.kawatsura.or.jp">http://www.kawatsura.or.jp</a>
3 所 在 地	〒012-0105 湯沢市川連町字大館中野142-1 湯沢市川連漆器伝統工芸館内	7 設 立 1950年(昭和25年)
4 T E L	0183-42-2410	8 組 合 員 数 89名(2017年度)
		9 伝 統 工 芸 士 32名
		10 主 な 製 品 椀、鉢、皿、盆、重箱、座卓、 タンスほか